

## 実践から見たがんゲノム医療の現状と課題

◎有働 恵美子<sup>1)</sup>

国立大学法人 長崎大学病院<sup>1)</sup>

2019年6月より、わが国では固体がんを対象としたがんゲノムプロファイリング(Comprehensive Genome Profiling: CGP)検査が保険適用となり、6年が経過した現在、日常診療において広く定着しつつある。国民皆保険制度のもと、がんゲノム医療中核拠点病院をはじめとする医療機関での運用が進み、これまでに10万人を超えるがん患者がCGP検査を受けてきた。

長崎大学病院は、がんゲノム医療拠点病院として、質の高いがんゲノム医療の提供を目指し体制構築を行ってきた。導入当初は中核拠点病院の知見を参考にさせていただきながら手探りの運用であったが、現在では、患者説明から出検、がんゲノム情報管理センター(C-CAT)への情報登録、エキスパートパネルによる検討、結果報告までを含む一連の診療体制が整い、安定した運用を行なっている。

CGP検査では、患者ごとの遺伝子プロファイルに基づき、専門家によるエキスパートパネルにおいて治療選択を検討するが、がん薬物療法や、遺伝医学、病理学、遺伝カウンセリング、バイオインフォマティクスなど、多職種による高度な知識と連携が求められるため、依然として大きな人的・時間的負担を伴う。また、新規治療薬の選択提示や予後改善への期待はあるものの、実際に治療に結びつく症例は全体の1割程度にとどまり、その臨床的有用性のさらなる向上が課題である。

さらに2025年3月には、造血器腫瘍を対象としたパネル検査が保険収載され、ゲノム医療の対象領域は拡大していく見込みである。がんや難病克服を目指す全ゲノム解析の実行計画も推進されており、関連分野の発展は極めて著しい。こうした急速な発展に対応するために、ゲノム医療における人材育成は急務であり、医療従事者には今後さらに幅広い専門知識と実践力が求められる時代が到来しつつある。

本セッションでは、がんゲノム医療の黎明期より現場に携わってきた臨床検査技師の立場から、これまでの取り組みの概要、現状、そして今後の課題について概説する。